



『街づくりは、幸せづくり。』

(北海道大学大学院 工学研究科 土木工学修了／

三菱地所設計 営業推進部 部長 (三菱地所より出向))

昭和60年3月7日卒業 角川 研 (高37)

平成28年～令和4年 紫芳会理事

◆立高時代

私は昭和57年4月9日立高に入学しました。^{ひのえうま}丙午の生まれで社会の実験材料宜しく都立高の入試も群制度からグループ制に変わった年でした。私自身は中学入学時に八王子から立川に引越していたので立高受験が可能になり、また入学してからは小学校時代の懐かしい先輩に再会でき嬉しかった事を覚えています。

クラスは1Hの男女クラス。担任は高7期の生物の石川先生でした。温厚な心優しい先生です。当時は一学年8クラスの内3クラスが全員男子の男クラでした。それを入学直後に知り唖然としました。

入学して間もなく春の遠足の雲取登山が雨で中止となりボーリングへと変更になりました。それに興じた後、下半身が痺れ歩行困難となり約一ヶ月半立川病院に入院しました。

医者からは原因不明と告げられ入学直後に見通しの立たない入院生活を強いられる事になった私は絶望感に襲われました。そんな中で当時母が人伝に聞いた鍼の先生と出会い、東洋医学によって4ヶ月後に立高に帰る事が出来ました。

2年の担任は数学の小山先生で大いに感化されました。元来お祭り好きな性分でしたので、立高祭にのめり込みファイヤーストームでは太鼓を叩き、BGチーム団長としてキャンパスを造るなど自由な雰囲気存分に堪能しました。

入学した時は、パイロットになりたく毎月保健室で視力を測ってもらっていましたが、裸眼で1.0を割り諦めました。将来に関しては、狭い日本では希少価値のある街づくりに興味を持ち始めました。

立高での様々な経験が、その後の人生において、組織の横串を刺す働きを率先垂範して行うのに大いに役立ちました。

◆就職

就職を考えた際、有楽町から東京駅を眺め、平地の少ない日本において都市の持つ希少価値に気付きこのエリアを有効に活用できる仕事に携わりたいと思い三菱地所を受けました。大学推薦の枠も無く、不動産バブルがはじけた直後の事でした。

面接の際、『なぜ、バブルがはじけた未来の無い業界を選ぶのか？トヨタが良いのでは？』と質問されましたが、『確かにロックフェラーまで買収してNYの心まで買ったと言われたバブルははじけましたが、丸の内の価値が変わるものではなく、逆に社会の変化に合わせて進化させる仕事があるのでは。』と答え、それが功を奏したのか分かりませんが平成5年はれて土木職の社員と成りました。

入社して29年働いています。土木職12年、営業職17年(内海外営業9年)をやりました。

その時の印象深いエピソードを3つ紹介します。

一つ目は、小樽の望洋パークタウン第3工区の開発です。400戸の戸建て住宅の造成でしたが問題が有りました。開発に反対する、あるお婆ちゃんが居たのです。実は開発行為は区域の8割の土地持ちの同意が有れば許可が下りるのです。お婆ちゃんの土地は中央を北海道道がとおり両側が宅地となる土地でした。そのお婆ちゃんは亡くなったご主人のその土地で仲間と一緒に畑作業をやるのを生き甲斐としていました。そんな中、開発許可を取得し造成工事を始めました。

私は現場監理の為、常駐を始め毎日昼休みに畑に通いました。始めは『近寄るな!』と言われましたが諦めず「達磨さんが転んだ」の様に毎日少しずつ近づきました。ある日雨の中、畑の傍で立っていると、休憩小屋に招き入れられました。

それでも『しゃべるな!』と言われてしまう始末。毎日小屋に入り黙っていましたが暫くしたある日、初めてお婆ちゃんが横浜の孫の話をし始めました。そして『お前も子供が居るか?』と聞かれやっと話し合えました。

それからはお婆ちゃんの好きな鳥羽一郎の話の聞いたりしました。そして、数日後ついに『このまま不同意を続けたらどうなるか?』と聞かれ、残念ながら土地の真ん中に北海道の道が有り強制収容されると本当の事を言いました。その後お婆さんはついに土地を売ってくれました。大いに感動し、また責任も痛感した面開発の仕事の大変さと同時に現在に至る中でも一番の達成感を味わえた出来事でした。

先日20年ぶりに現地を訪れましたが、すっかり成熟した街となっていて仕事冥利に尽きるものでした。

1999年12月16日、札幌グランドホテルにて元外務大臣の高村正彦氏(高12期)を囲む北海道紫芳会の集まりがあり、銀行、新聞、役人と北海道で活躍する皆様から刺激を受けました。2021年11月20日、創立120周年記念祝賀会で22年ぶりに高村元外務大臣と再会を果たし感無量でした。

二つ目は横浜みなとみらい21での市の依頼を受けてのマンション開発です。隣の先行開発したマンションのお客様への近隣説明で新規開発物件の高さが倍となる事から不満大爆発、直接抗議を受け仕事をして初めて猛烈な無力感に打ちひしがれました。鉛を飲んだような一日でした。結局、計画を変更し高さを半分に直し再度、2千人収容できる会場で近隣説明会の司会を命ぜられ、なんとか返答にもご納得頂き乗り越えられた際の安堵感は忘れられません。

最後の三つ目ですが、海外営業で初めて契約した中国は瀋陽の都市計画の業務です。計2回の支払条件で、第一回目の支払は予定どおり有ったのですが、業務終了後最終の支払がなされませんでした。理由を聞くと、この業務の為に取った予算を他の物件に振り替え支払った担当者が辞めてしまったとの事でした。海外で初めての業務であったので、社長からも金額の過多では無く気持ちの問題と言われ、取り立てる迄日本に帰ってくるなど言われほとんど困りました。業務を引き継いだ担当宛、接触を続け2年後ついに、予算付けし支払ってくれる事となり事なきを得ました。中国での仕事は、満額取り立てるのが大変な事を思い知らされました。

中国の仕事では、当時、宴会で白酒ばいじゅうの乾杯をしあいしましたが、彼らも苦しんで飲むのを見て何故なのかと考えました。ある時、名刺に書いてある肩書は信用できず、信頼できる相手か否かその飲み方で判断していると気づき合点が行きました。

その後、長春では2017年に『東第オフィスタワー』（地下2階地上39階高さ173メートル設計時、長春一の高さのオフィスビル）が竣工しました。これは、三菱合資会社が1935年に建設した『康德会館』（地階付4階、長春初のエレベーター）以来82年ぶりの設計でありました。

昭和11年に中37期の祝士紳さん・阮守維さんが長春から入学され同じ立高の2代目校舎で勉強されていたとか、その音楽室でピアノを小澤征爾（瀋陽生まれ）に教えた長兄、克己氏（中42期）、次兄、俊夫氏（中45期）が昭和3年、5年に長春で誕生したことを知るのは後の事であります。奇しきご縁を感じます。



また、台北では、事業コンペで当選し、2018年に竣工した『南山広場』（地下5階、地上48階、複合ビル、エントランス奥に開発史あり、101の隣、写真左側）の仕事をしました。

中国での仕事の進み方は、日本での仕事と全然違いました。日本の仕事はコツコツと一つずつ積み上げて完成させていきます。しかし、中国では、オールアップ、オールダウンを繰り返し決済者の判断一つで事が決まるやり方でした。そういう事を通し経験値が増え随分人間が強くなりました。

街づくりは、人との交わり無くして成しえない事を学びました。その点は基本的に人が好きだったので充実して働く事が出来ました。また、内田副社長（高8期）、柳沢副社長（高19期）や多くの立高の先輩が会社に居り大いに励みになりました。

◆立高生へ

仕事に関して、高校時代になりたいと思った仕事をやっている人は恐らく1割もいないのでは無いかと思います。それはまだ人生経験の浅い中での決定では無理からぬ事です。多くの方は、興味を少し多く持った分野の仕事を選択します。その中で、働くうちに新たな興味を持ち、ビジョンを掲げ働くことで面白くなり、熟練度を上げ幸福感を増すものであると思われま

す。本田宗一郎も『会社のために働くな、自分の生活をエンジョイするために働きに来い、それで一生懸命やることで会社共々いい』と言っています。幸い昨今は、同じ職場で一生を終える人は希少で、再就職の環境も整ってきているので、朝令暮改でどんどん進むのが良いと思います。

今後の立高生の世界での活躍を期待して終わります。ありがとうございました。

◇100歳目前の2022年3月31日に逝去された、府立二中から飛び級で海軍兵学校入学、卒業後即、大東亜戦争に参戦、戦艦「扶桑」、重巡洋艦「鈴谷」、駆逐艦「天津風」で国を護って戦い抜いた、44年先輩の小川治夫先輩（中36期、海兵70期）に哀悼の誠を捧げます。